「和」と「漢」のはざま

――連歌における漢詩文受容の一側面――

中本　大

はじめに

日本文学における「和」と「漢」の問題を考えるとき、「和歌」と「漢詩」の対比という観点は実に多くの示唆を与えてくれる――今更、声高に唱える必要もないほど、学界で定着した方法論である。しかし、先学諸氏が日本文化における和漢の構造の図式化に尽力して以降もなお、現在に至るまで、文学研究においては「漢」から「和」へ、あるいは「和」から「漢」へという一方向型の考察、つまり漢文学が和歌をはじめとする和文表現にどのように影響を与えたか、あるいは和歌的発想が漢詩文にどのように享受されたか、という視座での論攷が相変わらず多いのではなかろうか。[1]そもそも「和」は「漢」を内蔵しており、そのため「和」と「漢」は複雑に混淆し、一見してその関係が把握できない事例もある、という理解は必ずしも周知されていないのである。和漢の「受容」をめぐる問題、多くは典拠論に収斂するこの問題について、新たな論点が必要とされているのではないか。もはや従来のスキームでは覆いきれない事象が、文学史には溢れているのではないか――私はこれまで、和漢聯句や連歌の寄合、漢画系画題などを契機としつつ、決して一元的ではない日本文学における漢籍受容、漢文化享受の問題を取り上げてきた。[2]本稿でも、そうした問題意識に基づき、室町時代における和漢混交・和漢混在の問題について、まずは杜詩を端緒に考察したいと考えている。

一

杜甫は夔州滞在中の大暦二年（七六七）、中秋の名月を賞翫して四首連作を著した。「八月十五夜月二首」・「十六夜玩月」に続く第四首目が、次掲「十七夜対月」であった。[3]

十七夜対月

秋月仍円夜　秋月仍ほ円き夜
江村独老身　江村独り老ゆる身
捲簾還照客　簾を捲けば還た客を照らし
倚杖更随人　杖に倚れば更に人に随ふ
光射潜虯動　光は潜虯を射て動かしめ
明翻宿鳥頻　明は宿鳥を翻すこと頻なり
茅斎依橘袖　茅斎橘袖に依り
清切露華新　清切露華新たなり

その第三聯、老杜は月光の輝きを、水に潜むみずち（虯竜）を目覚めさせ、ねぐらに宿る鳥を飛び立たせるほどであった、と描写する。艱難辛苦の果ての、束の間の安らぎを詠んだ晩年の五律にあって、杜甫は幻想的な「潜虯」の対偶に、身近な風景に配される措辞「宿鳥」を選んだ。

詩語「宿鳥」について、『集千家註分類杜工部詩』巻第十二における同詩第五・六句の注釈では、

光射潜糾動　洙曰。謝霊運詩「潜蚪媚幽姿」。
明翻宿鳥頻　洙曰。楽府「月明星稀。烏鵲南飛。繞樹三匝。無枝可依」趙曰「宿鳥字出文選。言無定名。旧引烏鵲南飛。全不相干也」

という解説を加えている。すなわち、現存最古の杜詩別集を編纂したとされる北宋の王洙の名を挙げて、第五句の「潜蚪」が『文選』巻第二十二所載、謝霊運「登池上楼」詩に依拠するのと同様、第六句の「宿鳥」の典拠も『楽府詩集』や『文選』などに採録される曹操「短歌行」である、とする説を掲げるものの、続けて、宋代の趙次公の名を挙げ、「宿鳥」の出典は『文選』ではあるが、「宿鳥」を「烏鵲」とする王洙の解釈には根拠が無く、「短歌行」は杜詩の典拠ではない、という評釈を採録するのである。現行『文選』に「宿鳥」の語は見出せず、趙次公説の背景は必ずしも明瞭ではないものの、彼が「宿鳥」に名もなき鳥の姿を投影し、「言無定名（定名無きを言う）」と解釈したことは重要である。南宋期の杜詩集註本が、全面的に趙次公注を踏まえていることを想起すると、本邦での鑑賞にも多大な影響を与えたことは、自ずと諒解されるからである。実際、この杜詩の対句は、本邦禅林でも広く愛唱されていた。

本邦禅林で編まれた中国歴代詩人の総集『錦嚢風月』第二巻「宮室門」所収、釈恵嵩「甘氏別業」詩「夜沈々復日遅々、物々供詩総欠詩、宿鳥忽翻花架動、満庭香露滴酴醾（夜沈々復た日遅々、物々詩を供すれども総て詩を欠く、宿鳥忽ち翻して花架動き、満庭香露酴醾に滴たる）」の第三句傍線部でも、視点を「宿鳥」に凝集した上で、杜詩が典拠として用いられている。[4] そもそも『錦嚢風月』が「宋初九僧」の一人と賞される恵嵩（九六五～一〇一七）詩のなかで、敢えてこの作品を採録したのは、その詩画に秀でた学僧個人への尊崇だけでなく、杜詩を踏まえた点を高

く評価したためとも考えられるのである。

本邦の義堂周信（一三二五～一三八八）作「松月閣頌後序」にも「微風徐々而来、庭樹謖々而響、松閣月出、宿鳥乱鳴（微風徐々として来たり、庭樹謖々として響く、松閣に月出でて、宿鳥乱れ鳴く）」と月の光に驚いた宿鳥が乱れ鳴く光景が描かれる。[5] 五山文学の伝統に学んだ藤原惺窩門下の俊英で松永貞徳の長子、松永昌三（一五九二～一六五七）の別集『尺五先生全集』にも「中秋無月、遊蔵光院、得浮字、此嵯峨之作（中秋無月、蔵光院に遊びて、浮字を得たり、此れ嵯峨にての作）」から続く第三首「十七夜」に「霊籟払陰翳、蟾光照八埏、晴巒侵牖近、雲漢帯涼懸、宿鳥驚簾外、壁虫語枕辺、下絃雖入二、猶未減嬋娟（霊籟は陰翳を払い、蟾光は八埏を照らす、晴巒は牖近を侵し、雲漢は涼懸を帯ぶ、宿鳥は簾外に驚き、壁虫は枕辺に語る、下絃は二に入ると雖も、猶ほ未だ嬋娟に減ぜず）」とある。[6] 十七夜の月に「宿鳥」を詠み込むのは杜甫の影響と見て間違いないであろう。更に続けて掲載される「十八夜月、得回字（十八夜の月、回字を得たり）」詩でも「影明宿鳥驚、天豁冥鴻回（影明らかにして宿鳥驚き、天豁けて冥鴻回る）」という同じ措辞が用いられている。尺五が杜甫の発想を「宿鳥驚」という類型で詩嚢に収めたように、中世禅林で本格的に受容されて以来、杜詩は日本でこれほどまでに尊ばれ、学ばれてきたのであった。

他方、夔州時代の杜甫の作品を殊に愛好する素地も、本邦室町時代中葉の禅林に存在していた。一休宗純（一三九四～一四八一）の「看杜夔州以後詩有感（杜の夔州以後の詩を看て感有り）」詩や村庵・希世霊彦（一四〇三～一四八八）の「業叔遠別数年、山川相阻、日夜相思。偶寄詩藁二十絶。恰似看老杜夔州以後詩。欣慰不少。除夕（業叔遠く別れること数年、山川相阻めど、日夜相思ふ。偶たま詩藁二十絶を寄す。恰かも老杜夔州以後の詩を看るが似し。慰むること少なからざるを欣ぶ。除夕）」詩などがその証左である。「宿鳥」に寄せる杜甫晩年の心情は、戦乱が頻発する京都からの離散を余儀なくされた本邦禅僧の帰心にも重なるものだったのである。

措辞「宿鳥」を用いた杜甫の作品で最も知られているのは「無家別」詩であろうか。所謂「三吏三別」詩の一つとして著名な作品の一聯、

宿鳥恋本枝　宿鳥は本枝を恋う
安辞且窮棲　安くんぞ且つ窮棲するを辞せん

は、生活の貧苦を憾みながらも、故地から逃れられない宿命を、住み慣れた枝を恋う鳥の本能に譬えた表現である。本邦禅林でも「鳥恋本枝」が詩題として定着するほどに愛唱されていた。[7] この表現の背景には、言うまでもなく陶淵明「帰園田居（園田の居に帰る）」詩の一聯、「羈鳥恋旧林、池魚思故淵（羈鳥は旧林を恋ひ、池魚は故淵を思ふ）」があるものの、杜甫が選んだ詩語は「羈鳥」ではなく「宿鳥」なのであった。故郷の林を恋い慕う、

名もないねぐらの鳥は、漂泊の詩人・杜甫の姿そのものだったのである。

「宿鳥」の和語は「ねとり」である。本邦でも古くから親しまれた表現であるが、室町時代においては、そのイメージの形成に、杜詩以上に影響を与えた典拠が存在していた。以下、詩語「宿鳥」を糸口に、本邦室町時代における漢語受容の注目すべき事例を検証していこう。

二

室町時代において「ねとり」は雅語としてだけではなく、日常語としても広く使用されていた。『日葡辞書』に「Netori.」として立項されるのはその一例である。しかし本邦古辞書類を縦覧すると、「宿」一字のみの訓で「ネトリ」と記す例が『色葉字類抄』（黒川本）以来、易林本『節用集』などにも踏襲されているのである。もちろん後代の享保二年（一七一七）刊行『書言字考節用集』に至るまで、「宿鳥」を「ネトリ」と訓む例は数多く見出せる。では「宿」一字のみで「ネトリ」と訓む根拠は何なのであろうか。[8]

その答えは簡単に見出せる。『色葉字類抄』において「宿」字の注記で「ネトリ　射―」と明記されているのである。これは『論語』述而第七に見える「子釣而不綱、弋不射宿（子釣して綱せず、弋して宿を射ず）」を踏まえた注記である。[9] 孔子は、魚を獲るために網綱は用いることをせず、鳥を捕えるために巣に宿る鳥を射ることはしなかった、というもので、孔子の仁義観の発露として、慈愛や中庸、公明正大さなどの比喩として多様に理解され、多彩に解釈される一聯である。その受容は経書やその注釈書のみに留まらず、『弘明集』や『広弘明集』、『北山録』、『四明尊者教行録』など、中国でも夙に隋代成立の内典に至るまで広く及んでいるものの、ここではその文意の解明には踏み込まない。注目したいのは「宿」字のみで「ネトリ」と訓む、その理解の拡がりなのである。

文明本『節用集』でも「釣而不網、弋不射宿（ネトリ）〔述而篇〕」と記すなど、『論語』を典拠として、「宿」字を「ネトリ」と訓ずる理解が日本で周知され、広く定着していたことは予想される。以下、『論語』によってもたらされた「宿」字の理解が、日本中世文学史において、いかなる影響を及ぼしたのかを検討してみよう。

三

文明本『節用集』成立事情の詳細は確定できないものの、安田章が『中世辞書論考』（清文堂・一九八三）で述べたように、室町時代禅林で蓄積、活用された知識と無関係ではないとするならば、それとは異なる階層で成立した典籍の訓点は、あわせて確認しなければならないだろう。たとえば伝統的な本邦明経道での

『論語』訓法である。試みに京都大学附属図書館清家文庫が所蔵する『論語』の訓点を確認したところ、天文十九年（一五五〇）清原良枝書写本、天正四年（一五七六）清原枝賢書写本をはじめ、古鈔本を含む『論語』本文だけでなく、清原良賢筆『論語義疏』や古活字版『論語集解』などすべて「宿」字に「ネトリ」の訓を付しているのである。それだけではない。鑁阿寺所蔵で「足利本」として世に知られている『論語抄』や、阪本龍門文庫所蔵室町時代末期書写『魯論抜書』なども古辞書の訓と完全に一致しており、室町時代後期において位相を超えて「宿」一字で「ネトリ」と訓む理解が共有されていたことが知られるのである。

本邦室町時代の学儒や学僧が「宿」字から「宿鳥」を連想する重要な契機が『論語』であったことは重要であろう。漢詩文だけでなく、和書にも大きな影響を与えた『論語』の「宿」字について、本邦中世では更に興味深い注釈を付す事例が確認できる。ここでは清原家『論語』学の集大成と言える清原宣賢の『論語聴塵』（名古屋市蓬左文庫所蔵）述而第七「子釣而不綱、弋不射宿」への記載を確認してみよう。

○宿トハ宿鳥トテ、夜木ナトニトマリタル鳥也。孔子白日ニ弋シテ鳥ヲ取レトモ夜陰ニネタル鳥ヲハ取リ玉ハス。夜ハ鳥一所ニ集テ、イカホトモ取ラルゝ也。多ク殺スコトヲ禁スルホトニ不射宿ナリ。又ハ一羽射ヲトセハ残ノ鳥驚クホトニ宿鳥ヲイタマハス。仁心ノ至リナリ。……中略……一義不射宿（ヲヒトリ）トヨム也。疏云、或云不取老宿之鳥

末尾波線部、「宿」を「ヲイトリ」と訓ませることも、『論語』の文意を敷衍した独自な解釈で興味深いものの、これについては稿を改めて論じることとする。

ここで注目したいのは傍線部「又ハ」以降の解釈である。この内容は応永二十七年（一四二〇）本『論語抄』以来、室町時代の『論語』注釈にあっては、同じく宣賢の『魯論抄』などにも見られるもので、清原家で蓄積、継承されてきた解釈だと看做し得るものの、中国をも含めて先行する『論語』注疏において、一致または類似する解釈は見出せないのである。

「仁心」を殊更強調するこうした理解の背景に、たとえば次に挙げる禅籍の影響は考えられないであろうか。『虚堂和尚語録』（『虚堂録』）巻上「婺州雲黄山宝林禅寺語録」所載「重九上堂」では『論語』の当該部分に言及しつつも、意外な方向に展開するのである。以下に掲出する。[10]

重九上堂。……中略……僧云。汾陽道。重陽九日菊花新。此意如何。師云。我無隔水犀。自然塵不染。僧云。汾陽今日落節。師云。那裏見汾陽。僧便喝。師云。弋不射宿。乃云採菊東籬下。悠然見南山。陶靖節雖是箇俗人。却有些衲僧説話。雖然他是晋時人未可全信。（重九上堂。……中略……僧云く。汾陽道く。重陽九日菊花新たなりと。此の意如何。師云く。

我水犀を隔てること無し。自然塵の染むることあらず。僧云く。汾陽今日落節す。師云く。那んぞ裏に汾陽を見んと。僧便ち喝す。師云く。弋して宿を射ず。すなわち云く、菊を東籬の下に採り、悠然として南山を見る。陶靖節、これ俗人と雖も、却って些か衲僧の説話あり。然りと雖も他（かれ）は晋の時の人なれば、未だ全て信ずべからず。）

『虚堂録』は本邦禅林でも深く敬愛された南宋末の禅僧、虚堂智愚（一一八五～一二六九）の語録である。北宋初期の禅僧・汾陽善照（九四七～一〇二四）の著名な一句「重陽九日菊花新」の意を問われた虚堂が、傍線部の『論語』述而篇と陶淵明の著名な「飲酒二十首」の第五首を結びつけ、その禅味を指摘するのである。陶詩はよく知られるものではあるが、その作品を挙げておこう。[11]

結廬在人境　　廬を結びて人境にあり
而無車馬喧　　しかも車馬の喧しきなし
問君何能爾　　君に問う何ぞ能く爾る
心遠地自偏　　心遠ければ地おのずから偏なり
採菊東籬下　　菊を東籬の下に採り
悠然見南山　　悠然として南山を見る
山気日夕佳　　山気日夕に佳く
飛鳥相与還　　飛鳥相い与に還る
此間有真意　　この間に真意あり
欲弁已忘言　　弁ぜんと欲して已に言を忘る

虚堂が、『論語』の一節から、廬山の慧遠法師との親交でも知られる陶淵明の事績へと展開した意図は必ずしも明確ではないものの、「宿」鳥と「飛鳥相与還」句との類似性は一読、得心できるであろう。ねぐらに群れる鳥を驚かせることのないよう気遣うべきなのだ、という『論語聴塵』などに示された「弋不射宿」の独自解釈は、『論語』で言及された「宿」鳥と、夕べに塒（ねぐら）へと還る山鳥に「真意」を見出した淵明の境地――すなわちその悠然とした生き方とを重ねて「真意」を理解しようとした『虚堂録』の受容によってもたらされた可能性も考慮すべきなのである。もちろん、清原家の『論語』注疏において、禅籍への言及は一切見られない。しかし、禅僧と盛んに徴逐していた清家一門であれば、蓋然性は皆無と言えないであろう。『論語』と陶淵明詩とを結び付ける発想が、虚堂を尊崇する本邦禅林で受容され、定着していたのは疑いようがないからである。

四

ならば、である。『論語』の「宿」、つまり「ネトリ」を前掲、陶淵明詩を祖述する杜詩と意図的に繋げる発想や解釈は、本邦中世にはなかったのであろうか。

その可能性を示唆するのが、五山学僧の詩文ではなく、興味深いことに連歌の用例なのである。

実際、連歌は漢詩文に由来する発想や表現を、貪欲に寄合に取り入れていた。拙稿でもしばしば取り上げてきた後掲『連集良材』は、まさに室町時代連歌壇における漢籍受容史の集大成なのである。

「弋不射宿」についても、連歌寄合の充実に寄与した宗砌の付句、

ねさへなかるるなみのうきくさ
むらねするとりもいるやもみかくれて

（小松天満宮所蔵『宗砌発句並付句抜書』二三三三・二三三四）

は群寝する鳥と傍線部「射る矢」を詠み込んだ一句で、『論語』に依拠したことは明らかであろう。

こうした発想は後代の連歌師にも受け継がれていた。宗祇（一四二一～一五〇二）編『萱草』所載の二句一章を確認してみよう。

見ればのがれぬあみのうろくづ
射る矢をもねたる鳥には心せよ

この句は、宗祇の自注に、

「和」と「漢」のはざま

論語に釣不（テウスレトモカウセ）網、弋不（ヨクスレトモ）射宿（イネトリヲ）、此心ハ釣をハたるゝ共大あミをたてきりて無情魚をころすへからす、又弓をもて鳥をいる共ねたる鳥ハ射へからすの心か。

（野田千平氏『連歌古注　伝宗祇筆「萱草之内」「千句之内」（紹介と翻刻）』）

と明記されるように、『論語』の表現のみに依拠した寄合なのである。なお、この一聯は前句を「広きあみにはうをものかれす」とした上で『連集良材』にも採録されるものの、自注の内容を踏襲するのみで、典拠を逸脱したり、独自な解説を付加したりすることはない。[12]

さて、宗祇はこの寄合を愛好したようで、同じく付句を集成した『老葉』には、

弓づる音せぬ夜は（世長）閑也
竹ふかき陰をねとりや頼むらん

という作例も見出すことができる。一見して『論語』を踏まえているようには見えないものの、『老葉』の付注本である『愚句老葉』（早稲田大学図書館伊地知鉄男文庫所蔵）には、

（自）ねとりを射すと侍るにや
（長）ねとりを射すと云事あり此世竹にてつけらるゝなるべし

と宗祇自注・宗長注ともに典拠が明記されている。「弓づる」の「音せぬ」ことが「ねとり」を導く寄合として機能していたことが知られるのである。

『論語』には見られない要素である「竹ふかき」は、『和漢朗詠集』上巻・「藤」部所載の源相規の一聯「紫藤露底残花色、翠竹煙中暮鳥声（紫藤の露の底残花の色、翠竹の煙の中暮鳥の声）」に学んだと思われる源俊頼の『散木奇歌集』一二九九番歌、

夕くれ方に、なにとなくもの心ぼそくおぼえけるに、軒近き竹に雀のなきければよめる

日暮るれば竹のそのふにぬる鳥のそこはかとなきねをもなくかな

を踏まえた表現である。藤原清輔にも、

暮鳥宿林

夕されば竹の園生にぬる鳥の塒あらそふ声聞ゆなり

（『清輔朝臣集』三六〇）

という類歌があり、建武五年（一三三八）成立の尊円法親王撰『朗詠題詩歌』（『新編国歌大観』第十巻所収）「山」部に収められた「宿鳥声曛深洞竹、行人跡白故渓雲」など類似の発想は少なからず見出せる。文壇や歌壇で広く定着した表現であったと考えられる。

「竹のそのふ」が、「ねとり」が安心して憩える場である、というイメージは、同じく連歌作者で宗祇の先達である行助（一四〇五～一四六九）の付句、

竹にことふる声や雪折

寒き日は園のね鳥の驚きて

にその受容例を確認することができる（『行助句集』六九七・六九八、日文研データベースでは前句を「竹にこたふる」とする）。この行助句に『論語』の影響を見出すことはできず、一見、漢詩文とは距離があるように思われるであろう。しかし「寒き日」に「ね鳥の驚きて」という表現も、やはり漢籍に基づいているのである。

初唐の詩人・王勃の代表作で、本邦五山禅林でも愛読された『古文真宝』後集に収められる「滕王閣序」には、

漁舟唱晚、響窮彭蠡之浜。雁陣驚寒、声断衡陽之浦。（漁舟は晩に唱ひ、彭蠡の浜に響き窮まる。雁陣は寒に驚き、声を断つ衡陽の浦。）

という一聯がある。本邦五山禅林では「雁陣驚寒」が詩題として受容されただけでなく、「怨鶴驚寒蕙帳深」（瑞巌龍惺「九淵攜徽

統二子。来賀新正。留驩従客。仍賦狂斐謝厚意。兼示二子。」）という王勃の発想を敷衍した用例も確認される。「寒さに驚く鳥」という発想には明確な典拠があり、行助はこうした表現に学んだことが考えられるのである。

行助句の漢籍受容から派生する問題は、これだけに留まらない。次に掲げる室町末期天龍寺の学僧で『謡抄』の注釈を担当したことでも知られる三章令彰（生没年不明）の作例は重要である。

橋霜人跡

宿鳥驚寒黄葉村　宿鳥寒さに驚く黄葉の村
暁霜只自晩秋繁　暁霜只だ晩秋より繁し
板橋色摠似残月　板橋の色摠て残月の似く
乗興看来履有痕　興に乗じて看来れば履の痕有り

「宿鳥」が寒さに驚く、というまさに行助句と一致する措辞から始まる三章の詩題「橋霜人跡」は、『三体詩』所収、温庭筠「商山早行」詩より着想したものである。同詩の全文は以下の通りである。

晨起動征鐸　晨に起きて征鐸を動かす
客行悲故郷　客行故郷を悲しむ
鶏声茅店月　鶏声茅店の月
人迹板橋霜　人迹板橋の霜
槲葉落山路　槲葉山路に落ち
枳華明駅墻　枳華駅墻に明らかなり
因思杜陵夢　因って思う杜陵の夢
鳧雁満回塘　鳧雁回塘に満つ

この五律は『三体詩』所収詩のなかでも、夙に和歌作者にも愛唱されたようで、頓阿（一二八九～一三七二）や花山院師兼（生没年不明）、三条西実隆（一四五五～一五三七）などに「板橋霜」を歌題とした作例を見出すことができる。[13]

さて、温庭筠詩の鳥は「鶏」で、旅人の出立を促す役割であった。しかし三章は月を同じく夜明け前の残月、有明の月と見るのはそのままに、「鶏」を、空に月が残る霜晨の寒さに目を覚ます宿鳥のすがたに置き換えたのである。ここに杜詩への敬慕を見出すのは穿ち過ぎであろうか。

先述したように「寒さに驚く鳥」は常套的で、敢えて杜詩を重ねて解釈する意義は見出し難いとも思われるものの、三彰詩の「月」と「宿鳥」の配置が、往時、本来の典拠である温庭筠「商山早行」から逸れて、杜詩を連想させる契機になり得たことは注目すべきであろう。

実際、宗祇の連歌活動の全盛期である文明年間、杜詩を寄合にしたと思われる興味深い連歌作例が確認できるのである。

五

文明十七年（一四八五）二月二十五日、北野天神の祭日に細川政元が主催する恒例の千句連歌が催行された。京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「二月廿五日一日千句御発句御脇第三」に拠れば、この年の第一百韻の発句は足利義政が出詠し、脇句は政元、第三の作者は細川政国であったことが知られる。文明三年（一四七一）に能阿が没して後、連歌宗匠および北野連歌会所奉行を務めていた宗伊、杉原賢盛（一四一八～一四八五）が亡くなるのはこの年の十二月で、この千句でも連歌界の第一人者としての存在感を誇示するように、第二百韻で政元の発句、政国の脇句に続く第三を、第六百韻で発句を詠進している。

注目すべきは「二月廿五日一日千句御発句御脇第三」所載の第十百韻「何船同（丹州）」である。その冒頭三句は以下の通りである。

花やさく　遠山しろき　春の雨　　貞頼
みやこの木すゑ　□□□そふころ　　元家
あくるかと　つきにねとりの　すをいてて　　威郷

発句を出詠した「貞頼」は幕府奉行人を務めた松田貞頼（貞康）。脇は細川京兆家の家宰であった安富元家（不明～一五〇四）の作である。注目したいのは傍線部、第三である。作者「威郷」は未詳で、その文化的素養は不明であり、もとより百韻全句を知ることも叶わないものの、一句は、「月が明るく照らすので夜が明けたかと宿鳥がねぐらから出てきてしまった」という意味であろう。前句に欠字があるため、寄合は明確ではないものの（欠字は「かすみ」と推測されるが判読不能）、明らかに先掲、杜甫の「十七夜対月」詩を踏まえた付句であると考えられる。宗伊の晩年、『竹林抄』完成から九年、宗祇が全盛期を迎えた文明十七年、連歌の世界でも、和語「ねとり」の背景に『論語』だけでなく杜詩のあることが周知され、新たな表現の試みとして積極的に利用されていたことを示す証左なのである。

如上、ここまでの検証を通して浮かび上がってきたのは、連歌における典拠の「変容」であった。「ねとり」を詠ずる場合、院政期以降の和歌においては、『和漢朗詠集』や源俊頼歌の発想を踏まえることが常套だったにもかかわらず、室町時代、宗祇の連歌作例においては、先掲『論語』に依拠することが定型となっているのである。和語「ねとり」の背後には漢詩文の世界が広がっている、という認識は揺らぐことなく、その世界が「翠竹煙中暮鳥声」（『和漢朗詠集』上巻・「藤」部所載・源相規句）から『論語』述而篇、そして杜詩へと変化、否、重層化していったのである。

戦乱による荒廃、朝廷・幕府の弱体化や人材不足のために、歌壇と必ずしも不即不離ではなくなってしまった学問、経書注釈の

世界は、室町時代、五山禅林という新たな漢文化発信拠点における禅僧という新たな担い手とも盛んに徴逐した連歌作者によって、伝統的な価値観とは異なる発想や新奇な表現をもたらす源泉として再生、利用されたのである。そうしたなかで、連歌作者の嘱目が杜詩の措辞に及んだことは、まさに必然なのであった。[14]

おわりに

室町時代の文学における「和漢」の問題を考察したとき、その混交――決して「融合」などと安易に定義するつもりはない――の沸点のなかにあった文芸が、連歌であり、それを意欲的かつ自覚的に主導していたのが、著名な連歌師に留まらない、広義の連歌作者であったのは興味深い。連歌作者の「漢」の世界への関心は、柔軟かつ貪欲でもあった。それでいて彼らは自らの文芸の伝統を決して蔑ろにはしていないのである。歌語の背後に拡がる豊かな和漢の世界を、伝統に縛られ過ぎることなく、逸脱し過ぎることなく楽しむ――まさに茶人・珠光が説いたという「心の一紙」における「和漢のさかいをまぎらかす」という境地と軌を一にするものだったとは考えられないであろうか。[15] 五山僧が進んで享受した新たな「漢」の世界は、その新奇を敬慕する人々によって、これほどまでに日本の文化に浸透し、新たな趣向に結実したのであった。

注

（1） 千野香織は「日本美術のジェンダー」（『美術史』一三六・一九九四）において、平安時代の和漢の複合的構造を、島尾新は「会所と唐物」（鈴木博之等編『中世の文化と場』・東京大学出版会・二〇〇四）で和漢の入れ子構造について図式化している。島尾は「室町時代の画賛について――「禅林画賛」と「文人画賛」の関係から――」（『文学』二〇一一年十月号・岩波書店）や『「和漢のさかいをまぎらかす」―茶の湯の理念と日本文化』（淡交新書・淡交社・二〇一三）においても、この問題を取り上げている。

（2） 拙稿「誰のための「五山文学」か―受容者の視点から見た五山禅林文壇の発信力」（『アジア遊学』第二二九号・二〇一九）、「室町時代五山禅林は歌壇・連歌壇に何をもたらしたか―漢語「濫觴」の受容における五山禅林文壇の影響―」（天野文雄編『禅からみた日本中世の文化と社会』・べりかん社・二〇一六）等参照。

（3） 杜詩の本文は、『集千家註分類杜工部詩』（国立公文書館内閣文庫所蔵中国元代刊本）に拠る。訓読は私に付した。なお、本邦禅林の杜詩受容については、「日本中世禅林における杜詩受容―『集千家註批点杜工部詩集』の中期禅林に及ぼした影響―」（『禪學研究』八六・二〇〇八）をはじめとする太田亨の一連の研究や、王京鈺「五山句題詩の特徴」（『日本中国学会報』五七、二〇〇五）などの先学諸

氏の研究を参照している。

（4）本文は国立国会図書館蔵本のデジタル画像に拠るものの、堀川貴司による翻刻解題（「『錦囊風月』解題と翻刻」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一九八・国立歴史民俗博物館・二〇一五）を参照した。なおこの恵嵩詩については李白「題金陵王処士水亭」詩の一聯「酔罷欲帰去、花枝宿鳥喧」を参照している可能性も考えられるものの、作者の視線が風景そのものに集中し、人事に及ばないことから、杜詩の影響を強調した次第である。叱正を乞いたい。

（5）五山僧の詩文は、『五山文学全集』（思文閣出版）『五山文学新集』（東京大学出版会）所収本文に拠る。

（6）松永尺五の作品は、国立国会図書館蔵『尺五先生全集』所収本文に拠る。

（7）月舟寿桂や雪嶺永瑾の作例が確認される。なお、本稿で言及した杜詩二作品について、本邦禅林における解釈の指標となり得る江西龍派の講義を筆録した『杜詩続翠抄』にも掲載されている。「十七夜対月」では「宿鳥」の立項はなく、「無家別」詩では「宿鳥」を見出し語として掲げるものの、「心華無此科」として本邦禅林で編まれた心華元棣の杜詩注釈書『心華臆断』に言及しつつ、特段の記載が無いことを述べるのみである。『心華臆断』については太田亨「杜詩注釈書『心華臆断』について―日本禅林における杜詩解釈の様相―」（『日本中国学会報』五四、二〇〇二）が参考になる。

（8）古辞書の引用は、中田祝夫編『古辞書大系』（勉誠社）所載本文に拠る。『日葡辞書』本文は、『邦訳　日葡辞書』（岩波書店）に拠る。

（9）『論語』本文は、『論語集解』（内閣文庫蔵林家旧蔵本）に拠る。

（10）『虚堂和尚語録』本文は、内閣文庫所蔵慶長年間刊本に拠る。

（11）「飲酒」詩の引用は、笑雲清三『古文真宝前集抄』（『漢文叢書』十一・一九一四）所載本文に拠る。

（12）「頓阿句題百首」に「人跡板橋霜」（二一一）とあるのをはじめ、『師兼千首』に「板橋霜」（五二六）、『再昌草』に「橋上霜」（五一一九）等の歌題および作例が確認できる。なお、本稿における和歌引用は『新編国歌大観』（角川書店）所収本文に拠る。

（13）早稲田大学図書館所蔵寛永八年版本に拠る。なお、拙稿において『連集良材』に言及することは多いものの、「『聯珠詩格』は『新選集』の典拠か――『連集良材』所收、戴復古「子陵釣臺」詩を端緒に――」（『宋人文集の編纂と伝承』・中国書店・二〇一八）などがある。

（14）室町時代歌壇の杜詩受容については、小山順子「室町時代の句題和歌―永正三年五月四日杜甫句題五十首について―」（大取一馬編『中世の文学と学問』・龍谷大学仏教文化

研究叢書十五・二〇〇五）が、本稿とは視点が異なるものの参考になる。長らく新見が示されなかったこの分野において、小川剛生の最新の論考「頓阿句題百首の源泉―宋末元初刊の詩選・詩話・類書との関係を中心に―」（『藝文研究』第一一七号・慶應義塾大学藝文学会・二〇一九）は杜詩の典拠をめぐる十全な考察であり、往時の歌壇における杜詩理解を考える上で、非常に重要な成果であると評価できる。他方、必ずしも杜詩句の理解に関心が及ばない歌作の例を鑑みたとき、連歌作者の杜詩受容の先進性は興味深く、文学史的にも重要な問題提起をするものと考えられる。

(15) この問題については、橋本雄「珠光の嘆き――「心の一紙」を読み解き、「和漢の境をまぎらかす」を考え直す――」（鈴木幸人編著『かなしむ人間――人文学で問う生き方』・北海道大学出版会・二〇一九）から示唆を受けた。橋本の解き明かした珠光の問題意識は、「茶」の世界にとどまらず、能や連歌などの同時代文化や文芸にも広く展開すべきものと考えられる。ここでは五山文壇の成果も受容し、連歌界を革新した宗祇や、その周辺の連歌に携わる人々の指向の一端について考察したものである。

（なかもと・だい　本学教授）